

かつて大繁栄した鉾山の「木浦すみつけ祭り」

幕が下りるのか？ 「大分県の奇祭」 四百年の歴史に



Contents

- 4 大分県の奇祭 四百年の歴史に幕が下りるのか？
かつて大繁栄した鉾山の「木浦すみつけ祭り」
- 9 「番匠師」森本 真弘 氏
- 13 古民家が日本を元気にする
- 15 古民家農泊プロジェクト
- 17 匠主RUN
- 18 未来へつなぐ
- 19 新民家を訪ねて
- 21 TOUCH WOOD！
- 23 「移住物語」高知県 鈴木 昌樹子 氏
- 25 連載小説「木は生きている」作・森 久美子
- 31 法律の羽根
- 32 ロングステイの力
- 33 古民家鑑定士おすすめ！全国古民家データベース
- 35 How to 古民家活用
- 36 全国ネットワーク

荒城の月に歌われる 岡藩御用達の鉾山

大分県佐伯市宇目^{うめ}の山中に、木浦鉾山と呼ばれる場所がある。そこは山の谷間の切通のような細い路の先にあり、カーナビがなければたどり着けないような場所である。



この場所には現在、二十五家族三十一人が居住しているが、その多くは八十歳前後の高齢者。いわゆる限界集落である。

しかしこの場所は、今から四百年前、江戸時代には千軒もの住宅が建ち並ぶ有数の鉾山町だった。当時、この地を管轄していたのは、岡藩である。岡藩の城は、佐伯市に隣接する竹田市にある岡

城であり、竹田市出身の滝廉太郎が作曲した「荒城の月」のモデルの城のひとつと言われる。この岡藩の財政を支えたひとつが木浦鉾山だった。

産物は、鉛や錫^{すず}が中心で幕府に献上していたといわれるが、金や銀も産出していたという話も聞く。金銀の産出が文書の記録に残っていないのは、地方大名の裏資産形成だったのかもしれない。

過酷な鉾山労働のなかから 生まれた祭り

木浦鉾山には、「唄げんか」と呼ばれる子守唄がある。他の村から口減らしで売られてきた少女たちは、鉾山労働者の家で子守をしていた。それがあまりにも辛いといつて他の子守に向かつて唄でけんかを仕掛けることでお互いの辛さを慰めあつたという。辛い仕事は、鉾山だけでなく住人すべてに及んでいたであろう。

木浦鉾山は、さまざまな鉾物が採掘される宝庫であつただけに、江戸時代には大きな落盤事故も発生した。落盤事故から無事生還した者たちが一様に黒い顔をしていたことが、顔にススを付けて家内安全や健康長寿などの厄除けを願う「すみつけ祭り」の起源ではないかという説があるが、定かではない。



木浦の風景



木浦唄げんか

すみつけ祭りの 復活と終焉

木浦鉾山の「すみつけ祭り」は、過疎と高齢化により二〇〇五年に中止となった。ところが、高齢化した地元地区民たちの祭り存続の願いが強いことを知った、木浦鉾山出身で大分県内外に居住している人たちが祭り復活に立ち上がったのである。二〇〇八年のことである。

私は、この二〇〇八年の祭りの撮影に訪れていた。

この時の模様を、私は自分の写真ブログにこのように書いた。「もし日本祭り遺産というものがあるのであれば、木浦すみつけ祭りを登録したい」。私は日本の祭りを多く見て撮影してきたが、心が揺さぶられ感銘を受けるのは大きな祭りや有名な祭りではなく、観光客などほとんどいない、地元住民だけの祭りであることがほとんどだ。特に限界集落の祭りは、いつまで存続するのだろうかという危機感と背中合わせのため、余計に心が前のめりに入り込む。

二年前、この木浦鉾山すみつけ祭りの実行委員と名乗る佐藤氏から連絡が

あつた。木浦に残る年寄りたちの数も減り、二年後の二〇一八年二月の祭りを最後にすることを木浦のみんなから提案してきた。ついでに、最後を見届ける撮影をお願いしたいというものだった。復活した祭りの最初と最後を撮影するの、かという感慨もあり、二つ返事で承った。

すみつけ祭りの 準備風景

すみつけ祭りとは、大根の一片に墨^{すずり}の粉を付け、誰カレかまわず、「祝わせちよくれ」と一言断つて、顔に墨を塗りつけるというもの。

この祭りのために、大分県内外にいる有志が定期的に集まり実行委員会で話し合いを重ねてきた。祭りの準備として、神社会場の設営、大幣^{おび}という巨大な御神体の製作。八百個もの大根片の準備などがある。

なかでも、大幣の製作は骨が折れる作業だ。手ぬぐいほどの大きさの和紙を七枚重ねて、複雑な切れ込みを入れてゆく。切る和紙の枚数は千五百枚にのぼる。これを長さ五メートルの竹竿二本に飾り付ける。木浦に残る長老たちの指導を受けながら、若者たちが製作を担当する。祭りの前日、完成した大幣が置かれる木浦鉾山の集会所には、慌ただしく働く若者たちと、それを椅子に座つ

て優しく見つめる高齢の長老たちがいた。



大幣の複雑な和紙切れ込み



大幣製作の集会所



二本の大幣



大根を切る明るい女性陣



荒神舞の前日練習風景

最後の祭りの日

実行委員会の佐藤氏から、今回が最後になることは当日まで口外しないようにと言われていた。最後と発表すると予想外の観光客が押し寄せられるかもしれない。そうなる、自分たちの力ではコントロールできなくなるとい理由だった。過去には、特にカメラマンの自己中心的な行動や暴言で、たびたび不快な思いをしたことがあると言われ、私も

我が身を振り返りました。

当日朝十時頃から、ぞくぞくと神社がある高台の会場広場に人々が集まり始める。私の感覚だが、半数が木浦鉾山の元住民族か関係者。残り半分が観光客という配分かと思う。実行委員会の若者が、階段を登ってくる人々に大根を渡す。シヨックだったのは、立派なカメラを持つている人ほど、大根の受取りを断る姿だった。俺は写真を撮りに来たのであつて祭りに参加する気はないと態度が示していた。

荒神の降臨から祭りが始まる

祭り開始の花火が打ち上げられる。会場の石段の上にある神社から三人の荒神が、右手にムチ、左手に大根を持って、ゆつくりと舞いながら石段を下りてくる。すみつけ祭りの見所の一つだ。



荒神降臨

広場にいる数百人の観客は騒然となる。そこに、餅まきが始まった。最後ということで盛大だ。長時間にわたり、かなりの量の餅が空中を舞った。

すみつけ開始の合図があると、数百人の人々がお互いの顔に大根を押し当てて墨を付け合う「すみつけ」イベントが繰り返される。

ものの十五分ほどで、墨の付け合いは終わる。人々の顔は頬や額が黒い。そして、参加者は皆笑顔、笑顔。なんなのだろう、この子どものような笑顔は！

イベントの後、本当の祭りが始まる

広場でのイベントの「すみつけ」が終わると、多くの観客は帰り始める。これらが、本当の「すみつけ祭り」なのだ。広場から先導と呼ばれる八十四歳の長老が歩み始める。その後ろを二本の大幣と三人の荒神が随行する。



84歳の先導

二十五戸の住宅を荒神が個別訪問するのだ。訪問する住宅の玄関には御幣が付けられている。この住宅

の前に二本の大幣を立てられ、荒神が舞う。そして、住宅の中に荒神が入ってゆく。草鞋をはいた荒神は、土足のまま畳の部屋に入り込み、また舞う。住人たちは、荒神を歓迎し、一行を飲食でもてなす。江戸時代初期から続くといわれるこの祭りの、存続を願う老人たちの思いがわかる気がした。

道中の最後に訪問したのは、木浦エメリーという木浦に残る唯一の鉾山会社だった。エメリーという非常に硬い鉾物の採掘を続けてきたが、まもなく会社が閉鎖となる。祭りも消え、最後の鉾山会社も消える。

【最後に】

祭りが終わった時刻、集会所で直会が始まった。長老の一人が挨拶をした。「若い人たちが苦勞するから、そろそろ祭りも最後にしようということにしたが、本心はまだ続けて欲しい...」

実行委員会の若手メンバーから、ええ〜という驚きの声があがった。さて、実行委員会のみなさん、どうしますか？



荒神の最後の舞



閉山する木浦エメリー社の前で



Takataro Pictures Office代表
写真家
Takataro 氏
写真ブログ
「美しい日本、この一枚。」
<http://kono1.jp>



日本の「風景と伝統の祭り」を主なテーマとして撮影している写真家です。長年、日本全国を撮影してきましたが、それでもまだ見ぬ風景や祭りに出会いたいという情熱は増すばかりです。そして、その地にたどりついたとき、私の情熱を裏切らない美しい風景や感動の祭りを目にするのです。

大分の古民家のご相談はこちら!

一般社団法人全国古民家再生協会
大分第二支部
うとう まさかず
宛 洞 正和 氏

〒871-0027 大分県中津市上宮永2丁目182
TEL 0979-53-9297 FAX 0979-23-8261
<http://kominka-oita.org>